



教団百四十年型

ちばの理を頂戴するために



たすけ心を込め 懸命におつとめを勤める学生たち (6月30日 学生会総会にて)

真 朋

発行所

天理教芦津大教会

〒546-0003

大阪市東住吉区

今川8丁目6番32号

電話 06 (6702) 1980

FAX 06 (6700) 1854

Eメール shinmei@ashitsu.or.jp

印刷所 天理時報社

本部という理あって他に教会の理同じ息一つのもの。この一つの心治めにや天が働き出来る。めんくそれく心と心、天が見通しである。これより一つ心の理を治め。 明治39年12月13日

三代真柱様は常々「ちばの理を戴くとは、国々所々の教会にかかわる人々が同じ一つの心でおつとめをするということであって、その理によって、土地所の陽気ぐらしの御守護を頂くことになる」と仰せくださいました。おちばでは、あらゆるたすけの御守護を頂戴できる、かぐらづとめが勤められます。また教会名称や教会長の事情運び、おさづけの理の拝載など、たすけにかかわるすべてはおちばからお許しいただくもの。私たちは、親の御心に自らの心を合わせることでちばの理を戴き、御守護を頂戴するのです。おちばに足を運び、親神様、教祖に直接お礼やお誓いを申し上げ、たすけを願う。身も心も繋ぐおちば帰りは、いわば「たすけの筋道」。親に心を合わせ、おちばで戴きたすけの理と、おたすけの喜びこそ、私たちの信仰の原動力です。

夏になると、「こどもおちばがえり」『学生生徒修養会・高校の部』、続いて9月には「おやさとおふしん青年会ひのきしん隊」の入隊など、次代を担う若い人が親里に溢れます。一人でも多くの方をおちばに導いて、おちばの理を頂戴しましょう。

正面方加

5月の本部月次祭は日曜日ということもあり、おちばは大変な賑わいを見せた。参拝に行く途中、南礼拝場前の石畳で3人の警察官を見かけた。教祖御在世当時は、お屋敷の門前に官憲が立ち、参拝させないよう、寄り来る人々を追い返していたと聞く。逆に今は、安全に安心して参拝できるようにパトロールをしてくださっている姿を見て、本当にありがたい時代になったと思う。

本部でも教会でも、いつでも参拝ができ、おつとめができる。いつでも人のたすかりを願えるし、日々の感謝を申し上げることができる。

年祭活動も約半分が過ぎた。「この身がどうなっても」と決死の覚悟でおつとめを勤めていた先人の姿を思う時、今一度、自分にできることはないだろうかと考え、残り半分の一生懸命通らせていただこうと思う。

《6月月次祭 挨拶》

前真柱様の「教会内容の充実」への 思いを受けて

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃から教えの実践にお励みくださり、年祭活動のうえにご丹精いただきました。誠に苦勞様です。ご参拝くださいました皆様方と共に、6月の月次祭を勇んで勤めさせていただきましたことは、大変ありがたい次第です。

只今は縦の伝道講習会として、少年会本部・宇野明二郎先生よりお話を頂きました。この道は末代の道です。末代の御守護を頂くためには、次の世代をしっかりと育てることだと思います。その子弟を育てていく上で、また大きな御守護を頂ける場が「こどもおちばがえり」だと思います。どうぞ対象の子どもさん方には漏れなく声を掛けて、参加をお勧めいただきたいと思います。

明日の24日は、三代真柱であられる中山善衛前真柱様の十年祭がご本部で執行されます。前真柱様は、そのご生涯において、一貫して「教会内容の充実」を全教に促され、自らもそれを行動に移されました。

その一つが、部内教会へのご巡教です。2千カ所に迫る教会に足を運ばれ、親しくお声をお掛けなされて丹精を重ねられました。芦津にも相当数の教会にご巡教くださり、前真柱の立場になられてからも、たくさんさんの教会へ足をお運びくださったのです。そし

てその際のお言葉は、ほとんどが教会内容充実に関するお話で、集まった芦津の道の子たちに、教会にとってなくてはならない人材になってほしいと、教会を足場にした成人を促されたのです。

前真柱様が真柱のお立場で最後に勤められたのが教祖百十年祭ですが、この時の年祭活動においても、教会内容の充実をお話しされています。年祭活動2年目の春の大祭でのお言葉を少し引用したいと思います。

「教会がさらに教会内容の充実をして、国々所々に陽気ぐらしを實現するのを望むのでありますが、こうした理想がどうか理想に終わらずに、理想に終わったら困るのであって、理想に終わらず、現実へと努力するということが目下の急務であるとお考えいただきたいのであります」と、陽気ぐらしの世界は、教会の充実をもつて實現するものだ、これを理想に終わらせずに、そのための努力を求められました。

また「皆さん方に、教会内容の充実を目指して、自分こそ教会にいないてはならない人とならなければならぬ、またなるんだという目標に向かって、成人への道を積極的に歩んでいただきたい。一歩一歩、一日一日と地道でいいから歩みを固めていただきたいのであります」と、一人ひとりが教会になくてはならない人になることを目標に、コツコツと成人の歩みを進めていくことをお仕込みくださいました。このお言葉に、前真柱様の一貫した教会内容充実への思いが凝縮されているように思います。

世間の人は身近にいるようばくの言動を見て、これが天理教だと理解されるのですから、私たちようばくは「成程の人」に成人する努力を怠ってはいけません。また、教会の姿を見て陽気ぐら

しを理解されますから、教会内容の充実への丹精も大切になります。国々所々の教会がその地域の陽気ぐらしの手本になることで、世の中は陽気ぐらしへと次第に近づいていくのです。ですから、陽気ぐらしの手本としての教会が、私たちが求める教会の理想の姿です。

この理想の姿に誰が仕上げていくのかといえば、教会長や教会に住まいする人々、そして教会に入入りするようばく、信者の皆さんであります。「教会のために、私は何ができるのか」という思案に立つて行動に移すことが肝心です。教会長は教会長としての役割を担い、果たす。ようばくもようばくとしての役目を実行する。そして、それぞれが教会になくはならない人に成人させていたただく。そのための努力を重ねていきたいのです。これが前真柱様の長年のご苦労にお報いさせていただきますことになり、この心定めが明日の年祭の何よりのお供えになるものと思います。

さらに、この時のお言葉の中で教祖年祭の句について、「どうか皆さん方、教祖の年祭は、自分の心のふしんを反省する句でもあり、自分の、まず心のねじを締め直す句でもあるということを変更して考えて頑張つてほしい」と、道の子の奮起を促されたのです。年祭活動も折り返しの時となりました。お互いにこれまでの通り方をよく顧みて、反省すべきは反省し、修正すべきは修正し直し、心のねじを締め直して、御存命の教祖にお喜びいただける成人の歩みを揃つて再出発させていただいて、前真柱様のご期待にお応えさせていただきたいと存じます。

今月の月次祭も勇んで勤めさせていただきますことができました。誠にありがとうございます。

(要約)

立教百八十七年 六 月 月 次 祭 祭 文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教声津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の絶え間なき御守護と御存命の教祖の温かき親心を賜りまして、恙なき日々をお連れ通り下さり、成人への歩みをお導き下さいます御慈愛の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。私共は届かぬながらも、教祖のひながたを肝に銘じて、時句の御用に勤め励まして頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、心を一つに揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、六月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と参り集いました声津の道の子達が、日頃賜る厚き御恵みに御礼申し上げ、共におうたを唱和して、人々のたすかりと世の治まりを御祈念申し上げる真実の状を御照覧下さいまして、世界たすけの進展を御守護下さいますようお願い申し上げます。

さて、今月は少年会本部・宇野明二郎委員に来会を頂いて、神殿講話として縦の伝道講習会を開催致します。末代続く道の御守護を頂けるように、次の世代に道を通る喜びを伝え、信仰を継承して、縦の伝道に努力を重ねてまいりたいと存じます。

年祭活動も後半に差し掛かうとしております今日、私共をはじめ、声津に繋がる教会長、ようばくは、お姿を隠してまで子供の成人をお促し下さいました教祖の親心に改めて思いを致し、この親心にお応えできるよう、たすけ一条の実践実動に本腰を入れて取り組ませて頂く所存でございます。

何卒、一同の真実の心根をお受け取り下さいまして、随所で不思議自由の理をお現し下さり、年祭活動の勇んだ歩みをお導き下さいまして、陽気世界への足取りを一手一つに進めさせて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《6月月次祭神殿講話 縦の伝道講習会》

教祖のように優しい心で 道を通る喜びを伝えよう

少年会本部委員 宇野明二郎 先生

ただ今は教祖百四十年祭へ向かう年祭活動の折り返しです。論達には縦の伝道について、

教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通り、私たちへとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一步一步の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。

と、お示しいただいています。子供に信仰のありがたさを伝えていくことは、まさにただ今の年祭活動に通ずることになります。

大人の心を子供に映す

昨年の少年会年頭幹部会の真柱様のお言葉の中で、

家庭をはじめ、自分たちの関わる社会の中で、子供たちは大人の姿をよく見ているように思います。ありがとうございます、ありがたい

などの感謝の言葉からわずかな不足話まで、大人の何げないひと言でも、子供の心には、大なり小なり影響を与えます。

と、子供の特性について具体的に話いただきました。

ある日の夜、私が家に帰りますと、妻が頭を抱えているんです。

聞くと、昼に四女の幼稚園の家庭訪問があり、先生が「娘さんは言葉が短いように思います」と。友達

達が「遊ぼう」と言うのと「いらん」と言うだけです。いらんという言葉が短い。悪気はないのですが、少し言葉が足りないからきつく聞

こえるので、友達とのけんかの原因になるそうなんです。その「いらん」という言葉を妻が聞いて、「私やわ」と言うのです。

私たち夫婦の日常の様子を顧みますと、忙しくなるとついイライラしてしまい、短い単語が多くなり、「あかん」「早く」「何してんの」「まだ？」と子供にこうやって言

飯降よしえ12歳、胡弓・上田ナライト15歳、控え・増井とみゑ11歳。すべて少年会員の世代にお教えになれました。なぜ大人にお教えにならなかったんでしょうか。大人に教えたほうが覚えも早いし、伝わっていくスピードも早いと思うんですけれども、わざわざ少年会員の子供にお教えになられた。もしかすると大人に教えていたら、自己流になったり、あやを付けて間違った伝わり方となっていたかもしれません。

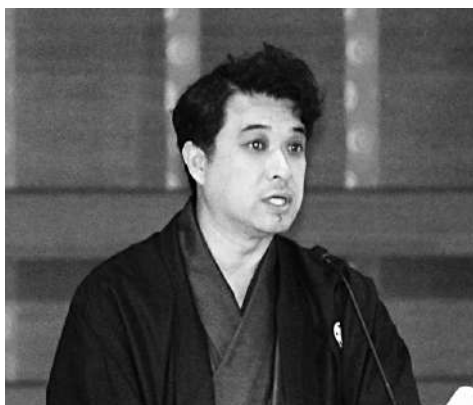
また、お風呂に入っていますと小学2年生の三女が鼻歌を歌っているの、私も知っていた曲なんので一緒に歌いましたら「お父さん、何か違うなあ、もう一回ここ歌って」と言うんです。歌うと、「いや違う。先生はこうやって教えてくれたよ。もう一回歌って。まあまあやなあ」と、数日前こんなことがあったんです。

ではなぜ未熟な少年会員をお選

『稿本天理教教祖伝逸話篇』の五二から五五のお話、すべて明治10年、教祖が女鳴物をお教えになられたことについてのお話です。

琴・辻とめぎく8歳、三味線・

この逸話篇を拝読させていただきましたと、教祖は自らお手本を示し、子供の手を取り優しくお教えになれば叱責することなく、道具の前に坐って、心で弾け。その心を



神が受け取るで、と。また、一人
で三二と弾いてこれが一ツ、とこ
うして稽古するんだよ、と順々に
丁寧にお教えになられております。
これは非常に根気のいることです
が、教祖のひながたから、子供を
導いていく上での大切な心構えを
学ばせていただくことができます。
おさしづに、
もう道というは、小さい時から
心写さにゃならん。

明治33年11月16日
とあります。教える、伝えるでは
なくて、大切なのは心を映すこと。

誰の心を誰に映すのか。言うまで
もなく、大人の心を子供に映して
いくのです。また、
道に外れたる心で育てようと思
うた処が育たん。

明治33年1月4日
とあります。

教祖の御心をわが心として、自
分の心に治め、そしてその心で子
供に接するから、子供にその心が、
教祖の御心が映っていくのです。

子供を導く親の姿

私は27歳で結婚して、翌年に子
供を授かりました。当時の私は一
人前の人間になっている、自分の
信仰を掴んだ、と勘違いをしてい
ました。そんな中、私の信仰の元
一日となる大きな出来事が幾つか
ありました。

1歳になる娘を連れて家族3人
で、修養科に入らせていただきま
した。ある日の朝、娘を天理託児
所に連れていくと、熱が38度あり、
預かれないとのことで、その日は
私が子供を連れて詰所へ帰り、妻

は受講しました。

詰所では、お茶を飲ませようと
思っても泣いて飲まない。また飲
ませようと思っても泣くんです。
お昼に検温すると、熱が40度まで
上がっていました。

妻が修養科から帰ってきて娘を
抱きかかえた瞬間、「わー」と言っ
て身体が硬直してえび反りになり、
妻の手から落ちそうなくらいのけ
いれんを起こしました。顔は紫色
になって目は白目をむき、口から
は泡を吹いて、熱性けいれんとな
りました。私たち夫婦にとつては
初めてのことで驚きましたが、と

っさにおさづけを取り次がせてい
ただきました。取り次ぎ終えたと
きには、だんだん小さい震えに治
まっていたんです。その頃救急車
が到着して、病院へ運ばれました。

娘の所に行くくと、1歳の娘の小
さな身体にたくさんの方が繋がれ
ぐったりしていました。その前で
私は、親として何をしていたんだ
ろう、修養科にきて人のあらばか
り探して不足をし、自分の心はす

さんで妻とイライラして、子供に
こうして見せられ、申し訳ないと
じつと子供の手を握ってうなだれ
ていました。そのときの私には、
ふたりのこゝろをさめいよ
なにかのことをあらはれる

と、四下り目二ツのみかぐらうた
がたしかに聞こえたのです。

妻との心は毎日すれ違っていま
した。親神様の親心は横に置いて、
目に見えることに不足をし、聞こ
えてくる言葉にも不足をしていま
した。

みなみてあよそばなもの
かみのすることなすことを

と、子供を通してわれわれ夫婦に
教えたいという親心をお示しくだ
さったのです。見事にみかぐらう
たによって私のいずんだ心は少し
光を見せていただきました。

すぐに父に電話をし、事の由を
報告すると、「よかったなあ、教祖
に抱きしめてもらってるなあ。2
人でよく話をしいや」との言葉で
した。

また後日、詰所での朝食中に娘

が子供用の椅子から落下し、後頭部を打ちました。その瞬間、お互いが目を離したと、また夫婦喧嘩が始まりました。そんなこととして、いる場合ではないのです。病院に行つてCTスキャンを撮ると、幸い内出血もなく、大難を小難に治めていただいでよかったなあと、妻とも言っていたのです。

このことを父に報告すると、「大難を小難に治めてもらったで終わっていないか。親神様の御守護があつて日々生かされているんや。

日々の理、少しでもさせてもらいなさい」とのことでした。神殿に足を運んだ際、少しでもお供えをさせていたでいて、3人が生かされていることにお礼を申し上げる。そうしたことをしていたので、2度見せられても分かっていない私たちに、またしても見せられました。

ある日、詰所で妻の財布から1万円が無くなりました。次の日、大人の方と若い男の子が私の部屋に来て、「宇野さん、申し訳ござい

ません。奥様の財布から彼が取つてしまったと言ってきました。すぐに返済させてもらいますから、水に流してやってほしい。許してあげてください」と仰つたので、私は「分かりました」と言つて返済を待ちました。1日経ち、3日、5日、10日経つても返つてこない。そのときにはお金が返つてこない。と日々のお供えができない、と私の心にこうまんと腹立ちのほこりが出ていました。

妻から「銀行にあるから先に引き出してお供えしよう。自分のほうから少しずつでも先に出して、親神様の御守護に感謝することを、私たちできていなかったよね」と言われました。納得し、次の日修養科の帰りにお金を引き出し、3人で神殿でお供えをしてお詫びとこれからの通り方の誓いのおつとめをさせてもらいました。

すると神殿から歩いて15分の詰所に帰つたときに、玄関で、あるご婦人が封筒を持って待っていたのです。中に1万円が入っていました。

した。

このことを父に伝えると、「わしはな、彼の手を汚してまでおまえたち家族をたすけたいと、これは神様の親心やと思う。そう思うたら、彼は恩人や。彼の背中に手を合わせる事ができるんじゃないか。人を憎んで恨んで通るのも一つやけども、その中、心を治めて通る道を、この信仰で伝えてくださつてるんや。よかったなあ」と電話で言ってくれました。

父は事あるごとに、ああせえ、こうせえと厳しく上からは言いませんでしたが。「わしはこう思うなあ。おまえはどう思う?」と、知らず知らずのうちに私と神様の親心との間を繋ぐパイプ役を、父はしてくれていたのです。

おさしづに、
十五才までは親の心通りの守護と聞かし、十五才以上は皆めん／＼の心通りのや。

明治21年8月30日
とあります。私は15歳までは親の責任、15歳以上は本人の責任だか

ら、親としては何もすることは無いのだ、と勝手に解釈をしていました。

私は生意気なことを父に言ったこともたくさんあります。そして当時の自分は、今さら父に聞けないというようなこともありましたが、信仰を全く掴めていない私に、父は正面から向き合つてくれ、子供を授かつて親としてまだ1歳の私を、同じ目線になつて導いてくれたのです。子供を導く親の姿ということを父から学び、教えてもらいました。

御恩返し的心を持つ

私自身親という立場になつて、日々実践していることで、わが家にはオリジナルの誓いのことばの唱和があります。おつとめ後、少年会の誓いのことばを言つた後に、「私たちの身体は親神様からのかりものです。目は全てのものを見て喜び、耳は全てのことを聞いて喜び、鼻は全ての匂いを嗅いで喜び、口は人の喜ぶことを言うため

につくられました。教祖は葉の一枚でも粗末にしてくれなと仰いました。物の命を大切にすると丈夫で長生きをさせていただけます。大変結構です」と言います。これは親神様の御守護と教祖の御教えを子供が覚えやすいように端的にしたものです。これも父から伝わり、私たちが幼少の頃からおつとめ後に唱和していました。今は私の子供たちも同じように唱和しています。

また、毎日の生活の中で、夕食時に何か会話が弾むようにできな

いかなという事で、今日一日嬉しかったこと、神様にお礼申し上げることなどを私が話を振り、拾ったごみの数やスリッパや靴を揃えた、また家のお手伝いをしたというように、人から親切にもらったことや、神様から生かされているのだな、おかげさまだという御恩に気付くきっかけ、機会をつくっています。

これらの実践は、日常生活で人から受けた恩、神様の御守護を感じ

じ、御恩返し的心を培ってもらうよう心掛けています。

教祖のように優しい心で

最後に、昨年から再開しました「こどもおちばがえり」についてですが、教祖のお言葉にもお示しただいております。おちばで受け入れる者に対し、

この家へやって来る者に、喜ばさずには一人もかえされん。親のたあには、世界中の人間は皆子供である。

『稿本天理教教祖伝』25頁

と、教祖は終始お屋敷へ帰って来る者たちを受け入れてくださったのです。おちばへ人を導く際には皆、教祖に代わって帰参する人々に満足させてやってほしいとの思召です。

昨年のこどもおちばがえりに参加したある男の子ですが、いじめがきっかけで不登校だった彼が、ご両親、おじいちゃん、おばあちゃん、そして会長さん、教区の先生といったたくさんの方の声掛

け、また一緒にごはん行ったり、おさづけを取り次いでくれたり、そうしたことから少しずつ心がほぐれていき、教会こども会に参加できるようになった。こども会だけではなく、お泊まり会にも参加できるようになって、やっと去年、こどもおちばがえりの少年ひのきしん隊に参加してくれました。

頑張ってくれていたんですが、残念ながら途中で帰ることとなりました。荷物をまとめて宿舎を出ようとしたところ、たくさんの方の仲間たちが「また会おうね」と言っていて玄関の所で見送ってくれたそうです。

そのことが本当に嬉しくて、また皆に会いたいなと思って地元に戻ってから、また学校に少しずつ通えるようになって、そして今年の夏も、またあの子たちに会いたいと言ってくれているそうです。

教祖のような優しい心をわが心として日々つとめる大人の心が、子供たちの心に映って、子供たちの心がほぐれていき、そして子供

たちお互いがたすけ合う姿に映っていくのです。これが、こどもおちばがえりだと思うのです。

こどもおちばがえりは単なる行事ではなく、親元を離れ、自分の目と耳とそして心で、人の優しさに触れ、人の温もりを感じ、陽光ぐらしの素晴らしさを体感する絶好の機会です。

おちばで繰り広げられる、子供たちお互いがたすけ合う姿に、われわれ育成会員が教祖のように優しい心で接し、少年会員が受け取りやすいように信仰のバトンを繋ぐ。そうした光景がまたおちばでたくさん繰り広げられることでしよう。それをご覧になられた教祖は、必ずお喜びくださり、よう帰って来たなあと、皆の頭をなでてください、待ってたでと抱きしめてくださるに違いありません。

おちばはたすかる所です。子供たちと共におちばに帰り集い、共に親孝行させていただきましょう。

第4回学生会総会開催

6月30日、芦津学生会（森道治委員長）は、第4回学生会総会を大教会で開催。芦津に繋がる学生ら45人（うち高校生23人）が集まった。

午前10時から総会を開始。森道治委員長（芦南）は祭文の中で、「日頃のお礼と、人をたすける心を込めておつとめを勤めさせていただきます」と奏上。また能登半島地震の被災者や世界の人々のたすかりを願った。

続いて、参加した学生ら全員はおつとめ衣を着け、3交替でおつとめを勤めた。

式典ではまず、大教会長が祝辞に立ち、おつとめの意義について、「世界中の人々のたすかりと幸せを祈っておつとめが勤められる」と説明された上で、「月次祭のおつとめを勤められるようほくに成人することを目指して、日々励んでいたきたい」と語りかけ

られた。

このあと森委員長は、毎月
の参拝デーなどの行事を紹介し、改めて参加を呼び掛けた。続く感話には、宮脇里奈さん（津阪）が立ち、学生会活動への思いを披露した。

午後は食堂を会場にアトラクションを行い、班ごとに分かれてゲームやパフェ作り、福引大会などで親交を深めた。



ドイツに布教所開設

紀周分教会

5月28日、ドイツ・フランクフルトに布教所が設立された。ヨーロッパに布教所が設立されるのは、芦津の歴史の中でも初めてのことである。

布教所長の中神あづささん（38歳）は、2020年1月に、ドイツ・フランクフルトに移住し、ゲームデザイナーとして働いている。

2年前に瀧本庄司・紀周分教会長より「神様を祀って、布教所を開設させていただいたかどうか」という話を、実家の母づてに聞いたときは、「何か大きなお道の御用をしなければならぬのか」「自分でできるのだろうか」と、プレッシャーを感じた。しかし、「神様を自分の家に祀ることができれば、毎日の朝夕のおつとめを神様の前でできる」ということが非常に魅力的に感じられ、熟考の末、神様をお祀りし、布教所を設立する

旨を会長に伝えた。

今後はドイツに留まらず、ヨーロッパの他の国に移住する可能性も踏まえて、布教所の名称は自ら考え「紀欧布教所」とした。

中神さんは「海外におられるようほくの方で、朝夕のおつとめを神様を祀らずにされ、寂しいなと思っています方は、私以外にも多いと思います。今後、自分のように、もっとたくさんの方々が神様をお祀りできる状況になればいいなと願っています」と、喜びと共に語った。



ひのきしん隊入隊に向け

詰所で伏せ込みひのきしん

青年会

青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は、7月14日、詰所でこどもおちばがえりの準備ひのきしんに励んだ。参加した青年会員10名は、看板用足場や麦茶を沸かす釜の設置、浴場・洗面所の清掃を行った。

松森誠太副委員長は、「9月の青年会ひのきしん隊入隊月に、一人でも多くの会員に隊いただけるよう、委員が率先しておちばのひのきしんをさせていただいた。こどもおちばがえりに参加する子供たち喜んでもらえれば嬉しいです」と語った。



看板用の足場を組み立てる青年会員

教務部報

布教所開設

紀欧布教所（紀周分教会）

所長 中神あづさ

〈所在地〉 kornmarkt 11,

60311 Frankfurt

Germany

〈祭典日〉 未定

立教187年5月28日

教養掛（4月、5月）

主任 井筒 文夫（4月）

西本 義之（5月）

教養掛

瀧本 亘・今川 聖一

松森 明美

教人登録

山田 元喜（當 別）

洪 里美（真明彰化）

立教187年5月25日

おさづけの理拝戴《5月》

三澤 陸斗（和 草）

三澤 仁（和 草）

萩原明日香（大崎原）

〈拝戴日順 3名〉

初席《5月》

〈4名〉 大崎原

〈3名〉 荻田町

〈2名〉 芦ノ郷

〈1名〉 直轄、畦川、紀内、

大島、本明勇

〈順序運びより 14名〉

計 報

芦津大教会婦人

大島分教会六代会長夫人

加世田美代子姉（かせだみよこ）



令和6年6月17日出直された。82歳。

告別式は6月20日、井筒文

夫・大教会役員齋主のもと、

鹿児島県奄美市の大島分教会

で執行された。

姉は、昭和17年満州国ハル

ビン市で生まれ、同33年大島

実業高等学校卒業、同37年お

さづけの理拝戴、修養科第25

期修了、教会長資格検定合格。

同38年教人登録、昭和48年芦

津大教会婦人を拝命。

結婚と同時に、若くして大

島分教会会長夫人として加世田

誠六代会長を支え、さまざま

な節を乗り越えられた。多く

のようばく・信者に慕われ、

いつも明るい笑顔で教会発展に尽力された。

また早くから毎月大教会、

おちばへと帰り、ぢば一条、

親一条に徹し、尽くし運びの

上に真実をもって通られた。

昭心分教会二代会長夫人

今川美代子姉（いまがみよこ）



令和6年6月6日出直され

た。享年93歳。

姉は、昭和7年大阪市阿倍

野区で生まれ、同26年おさづ

けの理拝戴、同27年修養科第129期修了、同30年教人登録。

昭和30年、本部直轄昭心教

会（中国北京より引き揚げ）

の後継者・今川政雄氏の許に

嫁がれて以来、政雄氏と共に

たすけ一条に歩まれた。教会

は同47年芦津大教会へ所属変

更となり、同51年政雄氏が二

代会長に就任されるとともに、

会長夫人として会長を支えつ

つ、寄り来るようばく、信者

の丹精に尽くされた。また上

級・東津分教会婦人としても

重き務めを果たされた。

月例統計（自令和6年1月1日～至令和6年5月31日）

項 目	初	の	修	教
名 称	席	お	養	人
() 内教会数		理	科	
		さ	修	
		づ	了	
		載		
大 教 会 (1)	5	7		
鞆 (13)	3			1
東 津 (23)	3	1		
吉 野 (29)	8	1		
島 原 (16)	11	1		
日 方 (15)	5	1		
稗 島 (7)	3	1		
本 津 (2)		1		
日 高 (2)				
始 良 (5)	1			
津 和 (12)		2		
門 司 (6)	3			
當 別 (6)				1
大 島 (26)	10	6		2
沖 縄 (3)	2			
尼 崎 (2)	1			
四 ツ 山 (5)	1	1		
大 冠 (2)				
島 下 (1)				
天 山 (3)				
青 保 (1)				
芦 浪 (1)	2			
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	7			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)		1		
兵 庫 眞 洲 (1)	2			
芦 ノ 郷 (2)	2			
本 明 勇 (2)	1	1		
明 道 (1)	4			
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	3			
神 滝 本 德 (1)				
芦 明 彰 化 (1)				
眞 明 彰 化 (2)	12	3		1
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	89	27	0	5